

京大研究者ら運営、左京の「応用科学研」



⑤機械基盤研究施設に導入されている最先端の加工機。部品の形を高精度に加工できる⑥今年で創設100周年を迎えた「応用科学研究所」(京都市左京区)



工学を社会に還元100年

京大の研究者らが運営する公益財団法人「応用科学研究所」(京都市左京区)が、今年で創設100周年を迎えた。産学連携の先駆けとして大正期にスタートしており、企業との共同研究や公募研究などに取り組んでいる。「これからの研究成果を社会に還元していきたい」としている。

産学連携先駆け 貢献

1917(大正6)年に、京都帝国大学教授の青柳栄司が財界人の寄付などを募って立ち上げた青柳研究所を前身とする。青柳がエンジンと会い感銘を受けた「研究を社会の役に立てる」との姿勢が研究所の基本理念にあるという。

39(昭和14)年には、後に京大総長を務めた鳥養利三郎が研究所を引き継ぎ、現在の名称に改めた。同時に研究分野をそれまでの電気工学だけでなく、工学全般に広げた。

戦中戦後には、主に部品の強度を高める「高周波焼入れ」の研究に力を注いだ。受託事業として発展し、研究所の運営を支える資金源の一つになっている。

他にもプラスチックで部品の表面に窒素を注入して硬化する技術や、新たなリチウム電池の開発につながったフッ素化合物に関する研究など成果を残している。

2015年には、DMG森精機(名古屋)やニコンなど5社の協力を得て最新の大型加工機や表面観察装置などを導入した機械基盤研究施設を設置した。自動車や船舶などに使用される機械部品の解析や評価ができ、品質の維持や向上につなげることができる。

同研究所は「日本を支えている機械産業の基盤強化に役立ちたい」としている。

(峰政博)